

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520139

研究課題名（和文） 佐々木喜善資料の調査と公開に関する総合的研究

研究課題名（英文） The synthetic research on analysis and exhibition of texts written by SASAKI KIZEN.

研究代表者

石井 正己 (ISHII MASAMI)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：30251565

研究成果の概要：『遠野物語』の話し手であった佐々木喜善は、その後、時代の最先端を行く学問を進めていた。ザシキワラシの研究はその始めであったが、今回はカードや書簡などの資料を翻刻して分析した。昔話の研究では、男性の語る昔話と女性の語る昔話に着目し、動物昔話や笑い話の中に込められた精神性を追究していたことが明らかになった。それだけでなく、現代伝説や都市伝説という視点をもって、新しい研究に臨んでいたことがはっきりした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：佐々木喜善、柳田国男、宮沢賢治、昔話、民俗学、口承文芸、遠野、教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 岩手県遠野市に生まれた佐々木喜善の評価は、従来、民俗学の中で行われてきたが、まだまだ柳田国男の協力者という域を出ていない。評価されても、民俗学の先駆的な役割を果たしたという、研究史の一齣にすぎない。しかし、佐々木の研究を進めてみると、その業績はすでに最先端を行っていたばかりでなく、現在の研究状況に照らしてもさまざまな警鐘を鳴らすような点が少なくない。むしろ、現代から顧みて再評価すべき点が数多く見つかる。今回、彼自身が持っていた資料が寄託されたが、

民俗学ではこうした資料を扱うことは困難であり、むしろ、文献研究を重ねてきた日本文学研究の領域で扱うことで、初めて資料の価値に光が当てられるように思う。さらにここでは「調査と公開」という課題を引き受けることによって、社会的意義が問われつつある文学研究のパラダイム転換を図りたいとも考えている。この研究は、旧態依然とした文学研究に安住するのか、それとも新しい文学研究を開拓しようとするのか、その選択を迫ろうとするものでもある。

(2) 寄託された資料のうち、平成17年度から平成18年度の2年間の基盤研究(C)「佐々木喜善資料の調査と公開に関する基礎的研究」で、単行本と雑誌の全体像がつかめたが、それ以外の詳細はまだわかっていない。その継承と発展を考える今回の申請では、2年間をかけて、特に調査カードと書簡に絞って集中的な調査・研究を進め、全貌の把握に努めたい。その際に、公開のための検索システムを考えるとともに、貴重な資料については翻刻を行ってゆく必要があると考えている。

2. 研究の目的

佐々木喜善は、柳田国男の『遠野物語』に話を提供した話者として知られる。しかし、佐々木はその後、東北地方の民間信仰や昔話・伝説の調査において、前人未踏の偉大な業績を残した。そうした業績を残した佐々木の資料のすべてが、遺族から遠野市に寄託され、その調査・研究が急がれる段階に来ている。その資料は単行本・雑誌の他、日記、ノート、原稿、カード、さらには、柳田国男やニコライ・ネフスキーなどの民俗学者や、宮沢賢治、北原白秋、泉鏡花、前田夕暮、三木露風などの作家の書簡を数多く含む。寄託を受けた博物館ではその資料の整理にあたっているが、点数が多ことから、その全貌は明らかでない。この調査・研究が進められれば、これまでほとんど知られることのなかった資料が、広く一般に公開されることになる。今回は2年間の個人研究として申請したが、遠野では16年間にわたる資料調査を重ねてきており、地元との信頼関係もあるので、十分な成果が挙げられるものと確信している。成果は、遠野市立図書館・博物館と相談しながら、全国の研究者や一般市民に公開してゆくつもりであり、それは大学と地方自治体の新しい関係の構築モデルになるはずである。

3. 研究の方法

本研究のための佐々木喜善資料は、岩手県の遠野市立図書館・博物館に寄託されているが、すでに所蔵する遺族はもちろん、関連機関とも連絡を取って進めてきており、調査・研究には全面的な協力が得られることになっている。遠野における研究はすでに積み重ねがあり、私自身は平成17年度より、非常勤で図書館・博物館に勤めているので、この研究が最も進めやすい環境にあると言える。

この調査・研究の成果をもとに、博物館で企画展を行うことを検討し、資料の保存と活用を考えて、できるだけよい形での公開を進めたいと考えた。それは、遠野市民

はもとより、関連の学界にも寄与することになるはずであり、今回は、平成19年度の遠野市立博物館第55回特別展「ザシキワラシ」で、それを実現することができた。具体的には、図録『ザシキワラシ』に、「佐々木喜善とザシキワラシ」を寄稿し、「ザシキワラシ調査カード」では写真入りでザシキワラシのカード全点翻刻し、「ザシキワラシ資料書簡翻刻」では佐々木喜善に寄せられた書簡を翻刻した。こうしたかたちで原稿から翻刻して全文を公開したのはこれが初めてであり、「調査と公開」というテーマを立てたことから実現できた、最も貴重な資料になったといっていだろう。

4. 研究成果

(1) 『佐々木喜善資料の調査と公開に関する総合的研究』の報告書刊行がある。全体は大きく、「第一部 研究編」と「第二部 資料編」に分け、「第一部 研究編」は4章立てにした。「第一章 佐々木喜善研究」は、佐々木喜善の業績を見直すもので、学術論文と講演記録を収録した。佐々木は『遠野物語』の話し手にとどまることなく、「民話研究の先駆者」として位置づけられることを主張した。ザシキワラシの研究はもちろん、『老媪夜譚』や『聴耳草紙』も大きな実験として評価でき、今日的な意義を持つことを力説している。「近代日本と『遠野物語』」「『遠野物語』と宮沢賢治」は遠野物語ゼミナールの基調講演だが、佐々木喜善の視点から論じた点が大きいので、ここに収録することにした。

「第二章 柳田国男研究」は、口承文芸や郷土研究という視点から論じたもので、やはり学術論文と講演記録を収録した。

「口承文芸とは何か」は、日本口承文芸学会の30周年記念事業として発刊した「シリーズことばの世界」全4冊の巻頭に位置する。「声」の発見——柳田国男と『遠野物語』も、同学会の「第三十号記念特集」に寄せた文章である。この二年間も、さまざまな場所で柳田国男に関する講演を行ったが、松江の「郷土研究と出雲——清水兵三と高木敏雄・柳田国男」と、塩尻の「菅江真澄の価値——柳田国男と信州人の情熱」を収録した。『遠野物語』以後、大正から昭和にかけて、柳田が地方人との間で結んだ連携について述べている。

「第三章 昔話研究」は、佐々木喜善の昔話研究の検証を行っている。特に、「子供と昔話」「昔話を語る女性、昔話が語る女性」「女性と昔話」のために、遠野昔話ゼミナールの基調講演であり、佐々木喜善の『江刺郡昔話』や『老媪夜譚』を原点しながら、語り部の活動の未来を考えている。これらを掲載した『子どもに昔話

を！』『昔話を語る女性たち』はいくつかの書評に取り上げられ、今も図書館等で広く読まれている。「笑い話の位置」「遠野昔話の原点」は、地元遠野で発刊された昔話集に寄せた序文であり、どちらも佐々木喜善の業績の再評価から始めている。

「第四章 その他」は、第一章～第三章に入らなかったが、今回の研究と関連を持つので、まとめて収録した。「人魚・河童・天狗——南部藩妖怪事情」は八戸市博物館の図録に寄せた文章であり、『遠野物語』から妖怪・見世物に言及している。「上閉伊今昔物語」の重要性』『ふるさと桐町』発刊の意義』『川柳の新たな挑戦』は、地元遠野で発刊された書物に寄せた序文である。「萩中美枝著『アイヌ文化への招待』発刊に関わって」「アイヌ・女性・口承文芸 シンポジウム」「口承文芸研究の未来のために」「植民地時代の昔話／グローバル社会の昔話」は、佐々木喜善に始まった口承文芸研究をアジアから考えようとした小文である。これからは、こうした方面の研究を重ねて、『遠野物語』や佐々木喜善を国際的な視野から考える方向に研究を進めるつもりである。

「第二部 資料編」は、『佐々木喜善全集』未収録の文章を複写のままに掲載した。

『女学世界』は大正7年2月～大正13年8月の7編、『家庭雑誌』は大正7年6月～大正8年3月の5編、『日本勸業銀行月報』は大正8年2月～大正12年8月の8編である。どの文章も学術論文ではなく、昔話や伝説を読み物風に書いたものである。「客観の記録」を重視した柳田国男の考えには合わないと思われるが、佐々木にとっては重要な業績であったと言わねばならない。こうした文章はまだあるので、今後も機会を見ては資料化していきたい。『佐々木喜善全集』は地元遠野で手探りをしながら発刊した労作であるが、今となっては遺漏が目立つので、機会があれば出版社から新全集を発刊してみたいと考えている。

(2) 間接経費を利用した『上閉伊今昔物語』と『佐々木喜善追悼資料集成』の発刊がある。

- ① 『上閉伊今昔物語』は、地元の『上閉伊新聞』掲載された報告を集成したものである。戦後、遠野で、佐々木喜善に刺激された郷土研究や郷土教育の展開を知ることのできる一級資料である。
- ② 『佐々木喜善追悼資料集成』は、志半ばで亡くなった佐々木喜善を追悼した文章を集成したものである。柳田国男、折口信夫、金田一京助、本山桂川、中山太郎、中道等、関敬吾などの文章を収録し

ている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 石井正己、つたえる—佐々木喜善の『聴耳草紙』の再発見—、口承文芸研究、第32号、130頁～133頁、2009、査読有り
- ② 石井正己、民話と佐々木喜善—視野の広がりとその方法—、聴く語る創る、第16号、2007、26頁～54頁、査読無し

〔図書〕(計12件)

- ① 石井正己、私家版、母からの贈り物 佐々木イセ昔話集、遠野昔話の原点、2008、1頁～5頁
- ② 石井正己、三弥井書店、ことばの世界I つたえる、口承文芸とは何か、2008、9頁～23頁
- ③ 石井正己、遠野物語研究所、復刻版 老嫗夜譚、時代を越える『老嫗夜譚』、2008、249頁～254頁
- ④ 石井正己、遠野物語研究所、『遠野物語』の誕生、近代日本と『遠野物語』、2008、11頁～57頁
- ⑤ 石井正己・正部家ミヤ・須知ナヨ、三弥井書店、昔話を語る女性たち、昔話を語る女性、昔話が語る女性、2008、13頁～34頁
- ⑥ 石井正己、三弥井書店、昔話を語る女性たち、「女性と昔話」のために、2008、115頁～122頁
- ⑦ 石井正己、講談社、桃太郎はニートだった！—日本昔話は人生の大ヒント—、2008、190頁
- ⑧ 石井正己、三弥井書店、民俗学と現代—批評の宝石たち—、2008、240頁
- ⑨ 石井正己、遠野市立博物館、ザシキワラシ、佐々木喜善とザシキワラシ、2007、12頁～22頁
- ⑩ 石井正己、遠野市立博物館、ザシキワラシ、ザシキワラシ資料書簡翻刻、2007、81頁～98頁
- ⑪ 石井正己、遠野物語研究所、遠野笑いばなし、笑い話の位置、2007、1頁～6頁
- ⑫ 石井正己、三弥井書店、子どもに昔話を！、子どもと昔話、2007、15頁～42頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 正己 (ISHII MASAMI)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：30251565

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者